



エクランドWakakoのアメリカ便り

新生児医療の現場から

from
USA

エクランドWakako 高校卒業の2年後に渡米。1991年にBSN（看護学学士）を取得、その後CCU、ICU、NICUでの勤務を経て2002年に新生児医療専門分野でMSN（看護学修士）を取得しNNPの資格試験に合格。現在、新生児医療専門グループの一員として、市内の複数の病院でNICU専門医療に携わっている。

1 これまでの私

私は、現在、アメリカテネシー州で、Neonatal Nurse Practitioner (NNP) という、新生児専門医療スタッフとして医療に携わっています。これから数ヶ月にわたり、NICUスタッフとしての過去の経験をまじえつつ、アメリカの新生児医療の「いま」を、できるだけリアルタイムに紹介していきます。

施設ごと、看護チームごとの事情は異なっても、NICUで求められる「アート」には共通点がある——このことを、これまで、大小さまざまなNICUを経験しながら感じてきました。海を越えてお届けする体験記に、読者のみなさんが「NICUナース精神」を感じてくださることを願っています。

ひとり旅立った17年前のこと

あるアメリカ人医師と看護師夫婦との出会いをきっかけに、看護の世界に無限の可能性を感じた私は、アメリカへ渡ることを決意しました。今から17年前のことです。成田空港で見送りの家族と別れ、1人税関へ向かったときの荷物のやたら重かったこと——この先、自分がしようとしていることの重大さを、はじめて実感した瞬間でした。

それからの8年間は、私にとってその後のプロフェッショナルライフの土台を築く、貴重な期間となりました。サウスカロライナの大学で看護を学んだ4年間は、大変厳しい反面、夢のように充実した日々でした。大学卒業後、まずはCCUで働くことになった私は、まだ看護師として最低限のツールを持っているに過ぎない状態でしたが、それだけに、なにをしても仕事は面白く、まるでスポンジのように新しいことを吸収しようとしていたことを、昨日のこのように思い出します。

ボルティモアにあるジョンズホプキンス大学病院で、おもに移植などを扱う外科ICUにしばらく勤めた後、結婚を機に南部のテネシー州に移り、テネシー州立大学病院で勤務をはじめました。そこではCCUとバイパスなどを扱うオープンハートユニット（OHU）に勤めていたのですが、それまで走り続けていた私も、バーンアウト状態に陥り、看護の仕

事をやめようとまで思うようになりました。以前から好きだったジュエリーの仕事を始め、米国宝石学会でダイヤを鑑定する資格を取るなどの寄り道もしましたが、そのことで逆に、看護の仕事が続けることができたようにも思います。趣味を多く持つことは、決して無駄にはならないのですね。

そんなとき、同じ大学病院内のNICUで、クリティカルケア経験者を探していると聞き、なぜか惹かれるものを感じてマネージャ

ーに電話連絡したのがきっかけで、NICUの専門ナースとしての道を歩むことになりました。ナースになって3年目、1994年の秋のことでした。

このNICUは、レベルⅢという、高度なレベルの医療を行う施設でした。心臓外科、脳神経外科などの手術も常時行えるよう緊急体制が整っており、ヘリコプターで未熟児を受け取りに行ったり、早産の母親の緊急搬送も行っているため、分娩数もかなり多い施設でした。ここで私は、初めてNNPの活躍ぶりを目の当たりにしたのです。患者を診る、医療方針を日ごとの回診から決めていく、緊急時の処置をするなどの一連の医療が、Neonatologist (Neo: 新生児専門医) とNNPとのチームによって行われていました。NNPの持つ決定権の大きさ、高度な技術、知識の深さにも驚かされました。そして、NeoたちがNNPたちを信頼している様子は、まるでNursingとMedicineがデュエットを奏でるようでした。NNPたちは、スタッフナースのコンサルタントや励まし役も担っており、スタッフナースにも研修医たちにも慕われていました。もっとも、そのときの私にとっては、自分がNNPになることなど夢のまた夢でしたが……。

NNPを目指そうと大学院に入学したのは、その7年後のことでした。大学院は、4年制大学とは比べ物にならないほど厳しく、学期を経るごとに仲間が減っていくのを見て将来の責任の重さを感じたものでした。私も何度もやめようと思いましたが、そのたびに以前の職場のNNPや家族、友人に励まされ、なんとか卒業にこぎつけたのでした。途中下車の不可能な特急に乗ってるつもりでがんばれと言ってくれた主人にも感謝しています。

卒業と同時に患者になって

2002年8月、大学院卒業を目前に控えたころ、私は自分の胸にしこりがあることを発見



私を支えてくれる家族です(中央が筆者)

しました。「37歳の私に？」と半信半疑でしたが、検査の結果、乳癌であることがわかりました。卒業を祝うイベントはおもいきりエンジョイしたのですが、NNPとしての仕事に就くことは断念せざるを得ませんでした。卒業後、すぐに新しい仕事に就いて全米各地で活躍し始める卒業仲間（クラスメート）を思うにつけ、全身に広がる無念さを抑えきれず、枕に顔をうずめて泣いたこともありました。

どうしても諦めることができず、乳癌発見後約1ヵ月で治療を始めると同時に、その数ヵ月後に控えたNNPの資格試験に向けて勉強を始めていました。3ヵ月後、試験の週は週2回の抗癌剤と毎日の放射線という、まさに治療の真っ最中でしたが、放射線を朝一番に済ませた後、車で3時間かけて試験場のある町に向かい、翌日の試験に臨みました。気分はひどく悪く、頭痛に悩まされながらの受験で、重い頭を無理に回転させてどうにか試験を終えて外に出た私の目に、澄み切った青空が印象的でした。

数週間後に合格通知を手にしたときは、手が震え、とめどなく涙があふれました。その後、治療を続けながらも面接を受け、治療終了まであと2ヵ月というところにNNPとして仕事のオファーを受けたときの喜びは、まさに感無量でした。

癌を乗り越えた今の私には、NNPとして活躍するチャンスが与えられています。病気の経験も含め、これまでのアメリカでの体験を思い起こすたびに、私を支えてくれた周囲のみなさんへの感謝の気持ちで胸が熱くなります。私に与えられているNNPとしての人生は、ひょっとするとそう長くはないのかもしれませんが、それでも、命はその長さにかかわらずなくすべて尊いはず——先天性疾患を抱えた赤ちゃんや前途多難な未熟児たち、そしてその両親たちの日々思いをはせながら、こんなことを考えたりします。目の前に広がる新生児医療の世界の奥深さに圧倒されながらも、一步一步確実に、NNPとして成長し続けたい——赤ちゃんたちの命の輝きに仕事への情熱をかきたてられることが、私のエネルギーになっているようです。

NNP (Neonatal Nurse Practitioner) ▶大学院レベルの専門教育を修了し、一般ナースの経験を生かしつつ専門的な役割を持つナース（アドバンスプラクティスナース；Advanced Practice Nurse）のうち、新生児医療を専門としてNICU内で患者を診るなど幅広い責任を持つナース。

Neonatologist▶新生児専門医。米国のNICUで主治医になるための資格。医学部卒業後、まず小児科医のレジデント（研修医）として3年間訓練して小児科医専門試験に合格し、さらにNICUで丸3年間主治医の指導を受けてはじめて資格試験の受験資格が与えられる。資格取得後も、更新のために7年ごとに試験を受け直さなければならない。
